楓之典君乳母草子

～日々是猫日～　其ノ拾

猫の妙術

中條　恵子　陸自85

紀渻子爲王養鬬鷄。十日而問「鷄已乎」。曰「未也。方虚憍而恃氣」十日又問。曰「未也。猶應嚮景」十日又問。曰「未也。猶疾視而盛氣」十日又問。曰「幾矣。鷄雖有鳴者。已無變矣。望之似木鷄矣。其德全矣。異鷄無敢應者。反走矣」

紀渻子は、周の宣王のために闘鶏を養っていた。

十日を経て王が問う「もう闘えるか」と。応えて曰く「まだでございます。むやみに強がり虚勢を張って

おります」と。

更に十日を経て王が問うに、応えて曰く「まだでございます。鶏の鳴き声が聞こえたり姿が見えただけで身構えます」と。

また十日を経て王が問うに、応えて曰く「まだでございます。他の鶏を見ると、睨みつけ、気負い立ちます」と。

更に十日を経て王が問うに、応えて曰く「もう良いでしょう。他の鶏が鳴こうとも少しも動じることがありません。あたかも木鶏の如く。その徳は全きものとなりました。いかなる鶏と雖も、これには相手にならずして逃げ出すことでしょう」と。

『荘子』外篇［達生 第十九］

○　猫の妙術

大鼠を労なくのそりと捉まえて、黒猫の技と虎猫の気を諭した古猫殿。その教えは続きます。

●　大鼠、灰猫の和にも応ぜず

次に、灰色の少し年経た猫が静かに進み出て申します。

「仰せのとおり気は大事ではありますが、象（かたち）があります。象がある限り、いかに小さくとも必ず見えます。私は心を鍛錬して久しくなります。虚勢を張ることもなければ、何物とも争わず、相和して離れず、相手が強がる時は、和してそれに寄り添います。私の術は帷幕にてふわりと石礫を受け止めるようなもの。いかに強い鼠であろうと、私に挑もうにもよるべきところがありませぬ。しかしながら、今日の鼠は勢いにも屈せず、和にも応じませぬ。その動きは神のごとし。かような鼠は、見たことがございません」

古猫が言うことには、

「お主の和というのは、自然の和には非ず。和を成そうとして居るのに過ぎぬ。敵の鋭気をかわそうとしたところで、僅かでも念が生ずれば敵はその気配を察する。欲を持ちて和すれば気は濁り、惰するに近し。欲を持って事を行えば、道理が自然にもたらす感を塞いでしまう。自然の感を塞がれてしまえば、精妙な働きがどうして生まれようか。

思うことなく、為そうともせず、ただ感に従って動くときは、自然に融和して己に象はない。象がなければ、最早己に敵する者は天下におらぬ」

●　古猫殿、道器一貫の義を説く

「とは申しても、各々方の修練したところが悉く無駄であったと言うのではない。『道器一貫』の義によれば、所作の中に至極の道理が含まれておる。気は、我が身を働かせる基と言うべきもの。その気が闊達ならば、物事に応ずるにも窮することなく、和する時は奮闘することなく、金石に当たっても折れる気遣いはない。しかし、僅かでも念慮するところがあれば全て作為となる。道理と一体の自然に非ず。故に、相手は心服せず、我に敵対しようする心を持つ。何故（なにゆえ）儂が何かの術など用いることがあろうか。無心にして自然に応ずるのみ」

「しかしながら、道に極まりなし。儂が申すことを以て至極などと思ってはなりませんぞ」

●　木猫は己を忘れて無物に帰す

「昔、儂の住む隣村にある猫がおりましてな、終日眠り居て勢気もない。まるで木で作った猫のごとし。彼の猫が鼠を捕ったところを誰も見たことがなかった。しかしながら、その猫がおる近辺に鼠は居なくなる。場所を替えても同じ、鼠は絶えてなくなる。

儂はその猫の所に出向いて、なぜかと問うてみた。しかし彼の猫は答えなかった。四度尋ねたが、四度とも答えはなかった。これはな、答えなかったのではない。答える術を知らなかったのだ。

ここで※「知者不言　言者不知」ということに儂は気付いた。彼の猫は、己を忘れ、無そのものになっておった。これこそ※※「神武不殺」というもの。儂もまた彼の猫には遠く及ばぬ」

※知者不言　言者不知

真の知識を有する者はそれを軽々しく口にしない。語りたがる者は未だ理解が足りない者である。

老子第五六章

※※古之聰明叡知　神武而不殺者乎

古の聡明で叡知のある人、神のように優れた武徳があっても殺さない人であろうか。

易経　繫辞上伝第十一章

―以下次号―

○　楓之典君のつぶやき

―先代チビ太兄者は、父上のお誕生日に小鼠を献上した数日後の早朝、虹の橋を渡りました也―

歌川国芳『鼠とりの猫』：東京国立博物館所蔵